

## 中世ナポリのウェルギリウス伝説

～『パルテノペ年代記』より

近 藤 直 樹 解説・訳

〈sommario〉

Virgilio, pur non essendo napoletano, ne divenne un rappresentante di rilievo tramite i suoi soggiorni nella città partenopea e le *Georgiche*. Nell' alto Medioevo all'epiteto di "sommo poeta" se ne aggiunge un altro, quello di "Mago", benigno a Napoli: "levò le sanguisuche da l'acqua", costruì "un cavallo di metallo per guarire li cavalli infirmi", provvide alle "carne che non puzzassero", "consacrò lo ovo allo Castello de l'Ovo" ecc.

La *Cronaca di Partenope*, raccolta delle storie di Napoli dalla sua fondazione fino all'epoca angioina scritte nel periodo fra il 1326 e il 1343, ci tramanda le più antiche leggende di Virgilio-Mago raccolte nella capitale del Regno. Ad una sua attenta rilettura ci sorprende come le caratteristiche linguistiche e l'immagine caotica della città non siano così differenti da quelle attuali, nonostante la mole di tempo passata. Dall'opera si evince chiaramente che Virgilio, più che come poeta, contribuì alla cultura napoletana piuttosto come Mago e protettore cittadino.

### I. 解 説

#### 1. ナポリの魔術師ウェルギリウス

共和政末期から帝政初期にかけて活躍した、ラテン文学を代表する詩人プブリウス・ウェルギリウス・マロ（前70－前19）は、中世には全く異なる相貌を見せることになる。卓越した詩人は魔術を身に着け、こよなく愛した都市ナポリとナポリ人の繁栄のために、その魔術を駆使して働いたという「伝説」が、いつしか語り伝えられるようになったのだ。

「魔術師ウェルギリウス」は、水道や城壁の整備、「ピエディグロッタの洞窟」の開通といったインフラにはじまり、ナポリに害をなす毒蛇や蠅、蟬といった動物や昆虫の駆除、そして温泉の設置や薬草の栽培といった医術に関する分野にまで手を広げている。

それではこうした魔術師としての伝説は、いつ頃、どのようにして誕生し、そして定着していったのだろうか。後述するように、残念ながらその全てを正確に解明することは不可能であると思われるが、同伝説がどのようにして書きとめられたかを知ることは難しくない。

ウェルギリウスの魔術師伝説がはじめて文字に記されたのは、1194年、クヴェールフルトのコッラードが、ヒルデスハイムの友人に宛てた書簡においてであった。コッラードは、神聖ローマ皇帝ハインリヒ六世の書記官にして、シチリアおよびナポリの皇帝代理を務め、後にヒルデスハイムの司教となった人物である。同書簡によれば、コッラードは、皇帝の命を受けてナポリの

市壁の解体を行った際に、「ウェルギリウスが建造させた市壁」という民衆の信仰を目の当たりにした。またコッラードは、青銅の馬像や、蠅、腐らない肉、蛇を閉じ込めた鉄の扉、バイアとポッツォーリの温泉などの話も耳にして、書き残している。これらのほとんどはその150年後に、今回訳出することになる『パルテノペ年代記 *Cronaca di Partenope*』<sup>1)</sup>に収集された。

唯一『パルテノペ年代記』に見られない逸話が、弓を引いてヴェズヴィオ山の噴火を留める青銅像である。ポンベイやエルコラーノの町を灰の下に埋めたヴェズヴィオ山を沈静化させるために、魔術師ウェルギリウスは弓を引き絞る男の青銅像を作らせ、その矢の先がヴェズヴィオ山になるよう配置させた。像の効果かどうかは分からないが、以降、ヴェズヴィオ山が噴火することはなくなったという。ところがある日、とある農夫がその青銅像に触れたために、像が引き絞っていた矢が放たれ、ヴェズヴィオ山をかすめてしまった。それ以降ヴェズヴィオ山は再び噴火を始めたという。

クヴェールフルトのコッラードの書簡から18年後の1212年、ボローニャ大学教授を務めた後、アルル王国の補佐官になったティルベリーのジャーヴァスが、神聖ローマ皇帝オットー四世の余暇のために、百科全書的な書物『皇帝の閑暇 *Otia imperialia*』を著した。ジャーヴァスは同書に、1190年頃サレルノおよびナポリ滞在中に見聞したウェルギリウス伝説を書き残している。彼が伝えているのは、腐らない肉、ノラーナ門近くの彫像の下にウェルギリウスが封じ込めた毒蛇、そして前述のヴェズヴィオ山の噴火を押しとどめる彫像などについてである。

コッラードとジャーヴァスの共通点は、両者ともに外国の知識人であり、ナポリに滞在した折に、地元の読み書きの出来ない民衆との接点の中で、彼らが信奉するウェルギリウス伝説を知るにいたったということである。そしてまた、両者ともにそれをラテン語で書き残している。つまりは、ウェルギリウスの作品の解釈をめぐって生まれた逸話ではなく、その反対に、いつの頃からか人口に膾炙するようになった民間伝承であり、それを知識人が書き留めたにすぎないため、魔術師伝説が「いつ、いかにして誕生した」かは、おそらくは知りえないのだ。

いずれにせよ、12世紀末には既に地元ナポリで知らぬ者はないほどの「都市伝説」になっていた「魔術師ウェルギリウス」をめぐる伝承は、コッラードとジャーヴァスの手を通じて、広くヨーロッパの知識人の知るところとなった。13世紀になると、とりわけフランスにおいて、「ウェルギリウス伝説」はラテン語のみならず俗語においても、テキスト化されるようになる。1245年に書かれた百科全書的な『世界の鑑 *Image du Monde*』、数か国語に翻訳され、当時のヨーロッパで最も広く読まれた作品の一つである『七賢人物語 *Roman des sept Sages*』、そして13世紀後半に書かれた『クレオマデス *Cleomadès*』の三作はその好例であろう。ナポリのローカルな民間伝承は、ウェルギリウスという中世ヨーロッパ全土の知的基盤となる詩人という形象を得て、汎ヨーロッパ的な物語となった。そして14世紀前半、アンジュー家の治めるナポリ王国の首都ナポリに帰還し、はじめてナポリの俗語で書きとめられて、『パルテノペ年代記』第一部の中核を成すことになる。

尚、「ウェルギリウス伝説」は、『パルテノペ年代記』の書かれた14世紀で終わったわけでは

ないことを付言しておきたい。その後も、誕生の地であるナポリ民衆の中でその想像力を掻き立て、語り継がれ、今に至っている。19世紀後半を代表する作家セラオーは、『ナポリの伝説 *Leggende napoletane*』（1891）の中に「魔術師ウェルギリウス *Virgilio Mago*」という章を設けて、19世紀当時に語り伝えられていたその表象を書き留めている。

## 2. 『パルテノペ年代記』

ウェルギリウスの魔術師伝説の地元ナポリの俗語テキストとしては最も古く、まとまった逸話が凝縮されたものとして、『パルテノペ年代記』は重要な史料的价值を持つといえるだろう。だが同書は、タイトルが直接的に語っているように、ウェルギリウス伝説のみを扱った書物ではない。ここでは、ウェルギリウス伝説を少し離れて、同書全体についての説明を試みたい。

### 2-1. 構成

『パルテノペ年代記』は都市ナポリの事象を扱った年代記であり、タイトルの「パルテノペ」は都市ナポリの起源に関わるセイレーンの一人で、「ネアポリス（新都市）」という名称が定着する以前には同都市の名称として使用されていた。フランス革命の影響を受けた1799年のナポリ共和国が「パルテノペ共和国」とも呼ばれるように、ナポリの別称としてその後も使用され、現在にいたっている。

同書は、ヴィツラーニの『フィレンツェ年代記』からの借用箇所を除けば大きく二部に分かれ、前半62章は、ナポリの都市としての起源から11世紀のロベルト・イル・グイスカルドまで、そして後半69章はルッジェーロ二世のいわゆる「シチリア王国」時代から、第二部成立の同時代であるアンジュー朝のジョヴァンナー一世までの時代の記述に割かれている。写本によっては後半をさらに二部に分けて、その前半をカルロ（シャルル）二世まで、そして後半をロベルト以降としているものもあり、翻訳のテキストとして使用したAltamuraによる校訂版はそれに従っている。

章立てをさらに詳しく述べると次のようになる。

#### 第一部

- 1-16 ナポリの起源からローマの植民都市となるまで
- 17-33 ウェルギリウスの魔術師伝説
- 34-50 キリスト教の聖人伝説（聖ペトロ、聖アスプレーノ、聖ジェンナーロ等）
- 51-57 ゴート人、サラセン人との戦い
- 58-62 ロベルト・イル・グイスカルド（前ノルマン時代）

#### 第二部

- 1-3 ルッジェーロ二世（ノルマン時代）
- 4-8 フェデリコ二世をはじめとするホーエンシュタウフェン朝
- 9-15 カルロー一世、二世（アンジュー時代）

## 16-69 ロベルト, ジョヴァンナー一世 (ドゥラッツォ時代)

## 2-2. 成立年代

上述のように、『バルテノベ年代記』は前半と後半で大きくその記述内容や特色に相違があることから、それぞれ別の時代に成立し、作者もまた異なるとされてきた。とりわけ、現在伝わっている14の写本の全てに、第一部の62章分は含まれているが、第二部はその通りではない。以下に訳出したウェルギリウス伝説を扱う第28章には「古代の文字による碑文が墓石に刻まれ、それは1326年の時点では損なわれずにあった」とあることから、第一部は少なくとも1326年には成立していたと思われる。また、アンジューのロベルト王について、現在の視点とみられる記述があるところから、同国王の没年である1343年より下ることはいないだろうと見られている。27章には「1380年頃になると、競技者たちは甲冑で身を包みながらも、命を落とす者は限りなかった」とあり、成立年代を引き下げる可能性もなきにしもあらずだが、概ね写本の誤りであろうとされている。第一部の作者あるいは編者をめぐっては様々な推測もなされたが、写本には直接及び間接的な手掛かりがなく、現在のところ「作者不詳」というほかない。

第二部については、写本間の異同も激しく、ウェルギリウス伝説とは無関係であるため、ここでは詳しく述べることは控えるが、多くの写本が次のような言葉で締めくくられている。「様々な写本から収集しました上記の短い情報を、ルイーゼ王に献上しますのは、陛下の忠実なる僕バルトロメオ・カラツォロ、通称カラーファ、ナポリの騎士にございます」。そこから、バルトロメオ・カラツォロ Bartolomeo Caracciolo が第二部の作者あるいは編者であるとされてきた。「ルイーゼ王」とは、おそらくはシャルル（カルロ）三世の父ドゥラッツォのルイーゼ（ルイ）のことであろうから、彼の没年である1362年より下ることはいないだろうと思われる。そしてジョヴァンナー一世に関する記述が多いことから、当然ながら彼女の女王即位の1343年以降であり、そのほぼ19年間に完成したものであろう。

現在伝わっている14の写本の他に、三種の刊本が知られている。初版には発行年も発行地も記されていないが、1486年から1490年の間だと推測されている。その後、1526年に、パヴィア出身のM. Evangelistaによってナポリで出版されたテキスト、そして1680年にCarlo Porsileによって同様にナポリで出版されたテキストが知られている。以降は、MuratoriやBartolommeo Capassoらが研究の対象としながらも出版されることはなく、1974年のAltamura版が、上述のようにヴィッラーニの年代記からの借用を割愛しながらも、唯一の校訂版となっている。

本稿では、第一部第17章から第33章までの、魔術師ウェルギリウスに関する全文を訳出した。

## 使用テキスト

Antonio Altamura (a cura di), *Cronaca di Partenope*, Società Editrice Napoletana, Napoli, 1974.

## 参考文献

Comparetti, Domenico, *Virgilio nel medio evo*, Bernard Seeber, Firenze, 1896.

Putignano, Aldo, *Dagli Angioini agli Aragonesi (1268-1543)*, in *Napoli, città d'autore*, Edizioni Cento Autori, 2008, Napoli.

Serao, Matilde, *Leggende napoletane*, Imagaenaria, 2004, Ischia.

ウェルギリウス, 小川正廣訳, 『牧歌／農耕詩』, 京都大学学術出版会, 2004年

セネカ, 高橋宏幸訳, 『セネカ哲学全集5倫理書簡集I』, 岩波書店, 2005年

原野昇編, 『フランス中世文学を学ぶ人のために』, 世界思想社教学社, 2007年

## II. 史料 翻 訳

17. いかにして, ナポリが風光明媚なために, ウェルギリウスが彼の地で『農耕詩』を創作するにいたったか

あらゆる詩人の中で最も令名高きウェルギリウスは, ナポリの官吏<sup>2)</sup>を務めたこともあり, この都市について語らないわけにはいかず, この地で『農耕詩』という書物を著した。それはオクタウィアヌスがマルケルスをナポリ人の長官に任命した頃のことであった。マルケルスの相談に乗ったばかりか, その師ともいべき影響力を行使したのが, ムーサエの申し子と呼ばれた賢人マントヴァのウェルギリウスであったが, 彼は地下に, 海へと流れ出る下水道を作らせた。公共の井戸は, あるいは街路の下を通る水道管を伝って, あるいはサン・ピエトロ・ア・カンチェッラリアと呼ばれた小高い丘に技術を尽くして溜めおかれて, 市中に築かれた公共の噴水へと流れて行った。そのマルケルスの知性とウェルギリウスの功績に敬意を表して, オクタウィアヌスはナポリを, 9つの都市の女神, あるいは壁で囲まれた城と呼び習わしたという。

18. いかにして, ウェルギリウスが, 魔術によってナポリから悪しき大気を追い払ったか

同地には, 沼沢地から発する悪しき大気のために, その頃大量の蠅が発生して, 生命の危険を脅かすことも多々あった。件のウェルギリウスは, この都市および都市民によせる大いなる愛情のために, 魔法の技によって, 星々の影響の下に, 蛙と同じほどの大きさの金の蠅を作った。この蠅の像の威力によって, 同都市を徘徊していた全ての蠅は逃げ出したという。それを伝えているのは, カプアーナ城の窓に安置されていた前述の大蠅を目にしたというアレクサンドロであり, 著書に書き記している。そしてジェルヴァージオ<sup>3)</sup>はその著書である年代記『皇帝のお告げ』において, それは正しくその通りであったと証言している。その後, 大蠅はその場所から取り除かれ, チカーラ城に移されると, 効力を失った。

19. いかにして, 魔力によって, ナポリの水から蛭を駆除したか

彼はまた, 星座の影響を取り入れながら金の蛭を作り, 井戸の底深くに投げ入れた。この蛭の効力と威力によって, 都市ナポリの水に大量に巢食っていた全ての蛭が駆除された。今でもなお, それなくしては何も成し得ない彼の魔力が効力を有しているのを, 我々は目にしている。完全な

る恩寵と魔力は現在までのみならず、未来永劫続くことであろう。

#### 20. いかにして、金属製の馬を作り、病める馬を治療したか

ウェルギリウスはまた、星座の組み合わせの影響を利用して金属製の馬像も作った。その馬像を目にすると、体内に何らかの病を抱えた他の馬は近づいていき、どんな病も快方へと向かい、ついには完治してしまった。ナポリの獣医は、おかげで病に罹った馬の治療に関する収入を手にすることができなくなったため、心痛のあまりある夜、馬像の腹部に穴を開けた。その後、破壊された馬像は効力を失ってしまった。馬像に使われていた金属は、1321年、ナポリ最大の教会の鐘を鑄造する際に活用された。カプアーナの「座」<sup>4)</sup>は、轡のない金色の馬を紋章に使用しているが、それはこの馬像のことだと信じられている。このため、カルロー世がナポリに入城した際に、前述の「座」<sup>5)</sup>および、轡のない黒馬というニードの「座」の紋章に驚き、以下の詩句を書きとるよう命じた。「Rex domat hunc aequus Parthenopensis equum/ hactenus effrenis nunc frenis parat habenas」。同詩句を俗語に直すと、次のような意味になる。「ナポリの正統なる王は、この制御の効かぬ馬を宥め、轡なき人間たちには、手綱を用意させる」。

#### 21. いかにして、魔法によって蟬を駆除したか

そのいとも高名なる詩人はまた、魔法の技によって鳴く蟬の銅像を作らせると、それを鎖で木に縛り付けた。大量の蟬が発生していて、その悪声のために、市民たちが夜間眠ることもできなければ休むこともできずに悩まされていたのだが、その蟬像の効力と威力のおかげで、ナポリから追い払われたという。

#### 22. またいかにして、肉が腐臭を放たぬよう策を講じたか

なんと上述のウェルギリウスは、同市に大いなる災いをなす南風が吹いた際には、生肉や塩漬け肉が腐敗するために、頭を悩ませていた市民たちの力になるべく、魔法の技を使って、様々な肉の塊を、その頃肉が売られていた（そして今でも売られている）旧メルカート広場の肉屋の軒先に吊らせた。その肉片の効力と威力によって、他の肉もみな、数日間はおろか数週間にわたって、色合いも、匂いも、味も変わることがなかったという。塩漬け肉は家庭に持ち帰った後、3年かあるいはそれ以上保存することができるようになったという。

#### 23. いかにしてウェルギリウスが、ナポリの果物に害をなしていた四月の風に対する策を講じたか

ファヴォーニオまたはフォラーノと呼ばれる西風は植物に害をなすが、ナポリには4月の初旬に到来し、枝や花々、そして木になる柔らかい果物を損なう。至高なる詩人は、星々の座と号の影響の下に、トランペットを口にした銅製の人物像を作らせた。その像が西風にあたると、星々の効力によって、反対の向きに風が吹き起り、西風は止んだ。そのおかげで、木々や果物は病



むことなく生長し、完熟するにいたった。

24. いかにして、市民の健康のために、効能あらたかな薬草をふんだんにナポリにもたらしたか

卓越して至高なる件の詩人はまた、しほり汁やシロップに役立つ薬草をつかって、人々の病気への対策を講じようとした。この世の多くの場所において、とりわけ夏季には目にすることができない薬草ばかりだったので、アヴェッラのミルコリアーノ近くのヴェルジネ山の麓に、驚くべき技と才知によって、庭園あるいは、あらゆる類の薬草が豊かに実る驚異の菜園を作らせた。病人の治療のために薬草を摘みに行こうとする者たちは、その庭園への道を、容易に見出すことができたが、それを破壊したり、枯らせたり、あるいは引き抜いて他の場所に植えるつもりで出かけた者たちは、目にすることがないか、あるいはそこへ至る道を見つけることがかなわなかった。その庭園では、我々の時代にあってもなお、効能あらたかな多くの薬草を採取することができて、そのうちのいくつかは、その他の場所には生育していないということである。

25. いかにして、魚がないところに、石に魔法をかけることで、大量に集めたか

件の詩人は、愛する都市ナポリが名声と富によって称賛されることを大いに願っていたのだが、ナポリ湾の水底が浅いために魚が釣れないのをみてとると、海と住民のために策を講じようと、石を加工させ、小さな魚の形に彫らせると、現在「ブレータ・デ・ロ・ペシエ（魚石）」と呼ばれている場所に安置させた。その場所では、件の石像が置かれた間は、ある時には少量に、そしてある時には大量に、大小さまざまな魚が釣れたという。

26. いかにして、ノラーナ門に、運命を告げる二つの頭を作らせたか

ナポリの入り口にあたるノラーナ門の上に、感嘆すべき星々の影響を取り入れながら、見事な人物の胸像を二つ、大理石を用いて作らせた。一つは笑顔の陽気な男性の像で、もう一つは泣き顔の悲しい様子の女性の像であった。像はそれぞれ異なる縁起と効力を備えていた。恩恵を手に入れたり問題を解決したいと願う者は、男性像、つまりは笑う像の方を眺めながら門をくぐると、それが良い兆しをもたらし、あらゆる問題において全ての願いは良い結果を生むこととなった。もしも泣き顔の像がある側に近づいて門をくぐると、問題は解決せず、あらゆる災厄が身に降りかかったという。

27. いかにして、カルボナーラの競技を思いついたか

また同じ頃ウェルギリウスは、毎年カルボナーラの競技が行われるよう指示を出した。だがそれは、後の時代のように死者を伴うものではなく、若者の武芸の練習のために行われ、勝者にはある種の褒美が贈られた。最初はオレンジを投げる競技にはじまったのだが、その後石を使うようになり、後には棍棒で殴り合うようになった。だが、参加者の頭はバシネットや革の兜で保護

されていた。その後時を経て1380年頃になると<sup>6)</sup>、競技の参加者たちは甲冑で身を覆っていたけれども、命を落とす者は限りなかった。この競技が「カルボナーラ」と呼ばれたのは、動物の死骸や炭（カルボーン）の燃えかすを捨てる場所で行われたためである。またウェルギリウスは魔法の技を使って、はるか昔に亡くなった4人の男の頭をナポリに置かせた。その頭は世界の四隅で起こった出来事についての真実を伝え、世界の全ての出来事がナポリ公に明らかになるようにしたという。

#### 28. いかにして、ウェルギリウスがナポリから蛇を追い払ったか

また、ナポリのノラーナ門のあたりに、現在ではフォルチェッラと呼ばれている石で舗装され整備された道があるが、件のウェルギリウスはその道に封印をし、大いなる神秘の術を用いて、あらゆる類の蛇と害虫を封じ込めた。神は憐みの心から、現在にいたるまでその封印をお守りになられ、建造物や井戸を掘るために地下に穴を掘削した時にも、その生死を問わず蛇や害虫が出てきたためしはなく、ごくまれに、木材や干し草に入り混じっていることがあるくらいのものだ。そしてナポリに滞在したウェルギリウスは、肥沃な土地に生まれたナポリ人の教えにしたがって、24歳の時にこの地で『農耕詩』を著した。同書には、いつ、いかにして畑を耕し、種を植え、どの時期に木を植え、伐採し、接ぎ木をしなければならないかが述べられているのだが、その末尾に次のような言葉がある。「その頃、閑暇においてはきわめて気高く、学究にあっては意気盛んな優しきパルテノベが私を育てた」<sup>7)</sup>。彼はロンバルディア生まれで、ペッタクラというマントヴァ近郊の農村で生を受けた。ウェルギリウスはその後、ユリウス・カエサルとオクタウィアヌスの時代に名声を博し、後者の治世25年目に<sup>8)</sup>プリンディジでその生を終えた。彼の亡骸はその後カラブリア人たちによって奪われ、ナポリに運ばれて、現在サンタ・マリア・デッリトリアと呼ばれている場所の、四つ角に瓦屋根のある四角形の小さな神殿内の墓所に埋葬された。古代の文字による碑文が墓石に刻まれ、それは1326年<sup>9)</sup>の時点では損なわれずにあった。その碑文には次のような二行の詩句が書かれていた。「マントヴァが私を生み出し、カラブリア人が私を奪い、今はナポリが私を手に行っている」<sup>10)</sup>。彼は韻文で『牧歌』、『農耕詩』、『アエネイス』を書いた。

#### 29. いかにして、ウェルギリウスがバイアの水を整備し、その水の効能を記して、記述に合わせた湯治場を作ったか

件の卓越した詩人はまた、クーマ近郊のバイアのあたりに湯が沸き、地下には豊かな水脈が走り、また硫黄ばかりか、鉄や明礬、ビッチや水銀などの様々な成分が見られて、大変効能においてすぐれているのを知るにいたった。そこで、ナポリ市民たちの公共の健康と、共和国全体に益しようと、多くの様々な湯治場を作らせようと考えた。とりわけ「トリトラ」と呼ばれた湯治場には、あらゆる温泉の名称と効能を書かせて、細心に設置させたが、それは貧しい病人が、慈悲の心もなく支払いばかりを要求する医師の助けや助言がなくとも、病の治療を受け、待望の健康



を手に入れることができるようにとの思いからであった。その湯治場でサレルノの悪しき医師たちは、自らの慈愛の欠如と大いなる邪悪を見せつけることになる。ある夜、その湯治場にたどりついた彼らは、全ての記述と効能の説明文を破壊し、剣やその他の道具を持ち込んで湯治場の建造物を破壊したのだ。応報にして正しい神の力が彼らを裁いた。件の医師たちは海路サレルノに帰る途中、猛烈な嵐と大波に襲われて、一人をのぞいて全員が溺死した。生き残った一人は帰着くとその有様を語り、他の医師たちが溺れたのはカプリとミネルヴァ<sup>11)</sup>の間であったと言った。

### 30. いかにして、ナポリの住民の利便性のために、現在フォレグロッタと呼ばれる場所に、洞窟（グロッタ）を作ったか

ポツオーリや前述のバイアの湯治場に出掛ける際に、峻厳な山の低木を分け入らなければならず、山を越えるにあたってはそれ以上の難儀に耐えなければならないという、ナポリ人たちの苦勞と面倒を知るに及び、件の詩人は、入り口からも出口からも、その山に洞窟を掘ろうと考えた。そんなわけで、山の下部に穴を掘れるよう、尺を使って地形を調べて、その山に穴を開通するよう命じ、穴倉あるいは洞窟の長さや幅をきわめて緻密に指示し、太陽が顔を出すと、洞窟の東側半分に朝から昼まで光が差し、昼から日没までは、西側の半分に光があたるようにした。そしてこの地が暗がり、陽も差さなかったために、通行人にとってみれば安全とは思われなかった。星座の位置と星々の運行を鑑みて、件の洞窟がその恵みを受けるようにしたために、戦時と平時を問わず、殺人や盗難、婦女子への乱暴といった不名誉な行いはけして見られず、旅人は恐怖も不審も抱くことなく洞窟を通ることができるようになり、潜伏を企てることもできないほどになった。このことは現在にいたるまで続いている。この洞窟について、セネカはルキリウスに宛てた第三書簡で次のように述べている。「ネアポリスに徒歩で行かなければならない時には、私はアルフェと呼ばれる洞窟の道を取る。かくも長き牢獄はなく、かくも薄暗き口の中はないだろう」。そして次のように続けている。「当然ながら、あの中に灯りがあったとしても、埃で隠されてしまうことだろう。洞窟から屋外へ抜けたところでさえ、耐え難くも煩わしいのだから、風穴もなく閉ざされている場所では、埃が舞い上がり、また舞い戻り（さらに煩わしいことになる）」<sup>12)</sup>。

### 31. いかにして、その名の由来となった卵城に、卵を奉納したか

その頃ウェルギリウスは、現在でも目にするのできる海中の岩礁の上に建てられた、「海の城」という名の城に興を示して、卵を奉納した。それは、とある雌鶏が最初に生んだ卵であった。彼はその卵を、口の細いガラスの水差しに入れると、精工に作らせた鉄の籠の中に収めさせた。さらに卵の入ったその籠を、入念に作らせた明り取りの窓が二つある特注の部屋の壁に、斜交いに走っている梁に打ち付けた鉄の薄板に、括り付けたかあるいは引っ掛けたか、それとも釘で打ち付けるかさせた。それから、頑丈な扉に鍵を掛けさせて、秘密の場所から、部屋にあった

その卵を徹底して厳重に監視させたという。城の名称となったその卵に、城の全てが懸っていたためである。昔のナポリ人たちは、海の城の趨勢はその卵に懸っていると信じていた。つまりは、卵が監視されて無事であるかぎりには、城も落ちることはないだろうということである<sup>13)</sup>。

### 32. いかにして、ウェルギリウスが魔術を習得したか

いかにしてウェルギリウスが、大いなる術と能力を手に入れたかには目を見張るものがある。それは、古い年代記が伝えるところによれば、彼がまだ若い時分のこと、弟子の一人フィロメーノを連れて、麓をくり抜かれたバルバロ山中のとある町を訪れた。その町と、そこで哲学者キロンテが行ったという奇蹟について、知見を得ようとしたためである。彼はその地で、件のキロンテの墓所を見つけた。そしてその頭の下から、一冊の書物を手に入れた。その後、その書物によって賢者となり、魔術やその他の術に精通するようになった。

### 33. いかにして、ウェルギリウスの遺骨が、落命の地であるプリンディジから持ち去られたか

伝えによれば件のウェルギリウスは、アウグストゥス帝の治世 25 年目に、プリンディジという町でついにこの世を去った。彼の遺骨に起こり得たことについて、沈黙、あるいは忘却に委ねておくべきではない。後に述べることになるシチリアのルッジェーロ国王の時代のこと、彼の地に滞在していたあるイギリス人の医師が、ウェルギリウスの遺骨を自由に手にすることができるようにと書かれた、ナポリ大学宛ての国王の紹介状を手に入れた。国王は、墓所にあったもの一切とともにその遺骨を大学に寄贈していたのだ。大学は、遺骨の移動によって都市が何らかの災難や災害に見舞われるのではないかと恐れて、その命令と紹介状に対して、全面的には従おうとしなかった。だが、大学あるいは都市ナポリが、彼らのうちの一人を伴って行くのであれば、ウェルギリウスの墓所に行き、銅製の盆に収められて遺体の頭の下に置かれた魔術や占術の書物をいくつか手にすることをイギリス人医師に許したのだから、部分的には国王の命令に従ったと言えるだろう。件の医師はそれらの書物を持ち帰った。すると、その医師やあるいは他の人々によって夜間に持ち出されることのないようにと、遺骨が集められて、革の袋に収められ、卵城に保管された。遺骨は後に、鉄柵越しに、全ての見学者が目に見えるように置かれた。その後、その遺骨で何をしようとしていたのかと問われた医師は、陰謀を企てていたのだと答え、もしも 40 日間その遺骨を手にしていただければ、ウェルギリウスの魔術の全てを習得していただろうと述べた。だがナポリがキリストの教えに転向すると、件の遺骨は、卵城内部の宝庫の中に厳重に置かれることになった。ウェルギリウスの書物に関して、聖ジェルヴァージオ<sup>14)</sup> が証言しているところによれば、教皇アレクシオの時代、ナポリの枢機卿ジョヴァンニ立ち会いの下、これらの書物を用いて実験をしたところ、全てが正しかったという。また、あるスペインの枢機卿は、キリスト生誕の夜、世界の三つの離れた地域で、三つのミサを行ったと信じられている。その当時ローマ教皇の宝庫に保管されていたウェルギリウスの書物によって習得した魔術を使って、彼はそれを実現したのだと言われている。

## 註

- 1) 現在ではこのタイトルで知られているが、1526年および1680年の刊本では *Chroniche de la Inclyta Città de Napole* となっている。
- 2) ドナトゥスの『ウエルギリウス伝』などによれば、ウエルギリウスはナポリで学んだのであり、「官吏」であったことは一度もない。中世年代記につきものの誤りであろう。
- 3) 「ジェルヴァージオ」が解説でも触れたジャーヴァスであるのは疑いないが、「アレクサンドロ」については、多くの研究者がイギリスの神学者にして詩人のアレクサンダー・ネッカムであると推測しているものの、定かではない。Cf. Comparetti
- 4) piazza, seggio, sedile などの言葉で呼ばれる、中世のナポリの行政区。カプアーナ、モンターニャ、フォルチェッラ、ニーロ（ニード）、ポルタ、ポルタノーヴァの6つが、いわゆる都市貴族の「座」であり、その「代表」に選出されるのは、地区を代表する貴族に限られていた。他に「市民の座」が一つあり、富裕な商人階級がその「代表」に選ばれるのが常であった。
- 5) 「カプアーナの座」のこと。カプアーナの座の紋章は金の馬で、ニード（ニーロ）の座の紋章は黒馬であった。
- 6) 解説でも紹介したように、同書成立年代の特定にとって重要な箇所と思われるが、Altamura は写本の間違いとしている。Cf. Altamura
- 7) ウエルギリウス『農耕詩』第4歌末尾の表現だが、原文とは多少異なる。原文を日本語訳で紹介しておく。「そのころに、私ウエルギリウスは、麗しきパルテノベの地に養われて、／名もない平和の営みを、心ゆくまで楽しんでいた」。(ウエルギリウス・2004)
- 8) ウエルギリウスの没年は前19年であり、その25年前は前44年にあたる。オクタウィアヌスが「アウグストゥス」の称号を得て、いわゆる「ローマ皇帝」になるのは前27年であるから、勘定には合わないが、前44年はカエサル暗殺の年であり、その後継者として葬儀を行うなど、彼が頭角をあらわしたことを受けているのであろう。
- 9) 同書第1部の成立年代の上限の根拠とされる箇所。おそらくこの箇所が書かれた時点が1326年であったかと思われる。
- 10) ドナトゥスの『ウエルギリウス伝』によれば、ナポリ付近に置かれたウエルギリウスの墓碑銘は次の通り。「われはマントゥアに生まれ、カラブリアで世を去った。今は／パルテノベに抱かれる——牧場と農園と勇士を歌ったのちに」(ウエルギリウス・2004)
- 11) 伝承によれば、かつてソレント半島にはミネルヴァの神殿がそびえていたという。ここではソレント半島の岬の突端とカプリ島の間を指している。
- 12) 実際は「第三書簡」ではなく、「ルクッルスに宛てた倫理書簡集」の57番目にあたる。原文では「アルフェ」にあたる言葉は見られない。
- 13) 現在では「卵城 Castel dell'Ovo」と呼ばれる城塞についての伝承。ウエルギリウスによって、城の基礎部分に卵が設置され、その卵が壊れるようなことがあれば、都市ナポリが崩壊するという伝承もあり、現在ではその方が広く伝えられている。だが中世の伝説においては、都市の崩壊は、都市の完全なミニチュア模型を入れたガラスの瓶に帰されていて、おそらくは時代が下るにしたがって、その二つの伝承が混同されて伝わったかと思われる。
- 14) テイルベリーのジャーヴァスの『皇帝の閑暇』を指しているが、彼が聖別された事実はない。

